

国立国語研究所学術情報リポジトリ

断わりとして用いられた日韓両言語の「中途終了文」：ポライトネスの観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): politeness, "unfinished" sentences, ickenai sentences, ikanai sentences 作成者: 元, 智恩, WON, Jieun メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002145

断わりとして用いられた日韓両言語の「中途終了文」

—— ポライトネスの観点から ——

元 智恩

(釜山大学校)

キーワード

ポライトネス, 中途終了文, 「行ケナイ文」, 「行カナイ文」

要 旨

本稿では、ポライトネスの観点から、主節が省略された日本語と韓国語の「中途終了文」と、主節が省略されていない可能表現の否定文（以下「行ケナイ文」）および通常の否定文（以下「行カナイ文」）を比較分析した。研究方法としては、教官と友人の依頼を断わる場面における「中途終了文」、「行ケナイ文」、「行カナイ文」のポライトネスの度合いについて、日韓両言語の母語話者の意識を問う質問紙調査を用いた。

日韓両言語を比較すると、「行ケナイ文」と「中途終了文」は、「行カナイ文」よりポライトネスの度合いが高いということ、「中途終了文」は「行ケナイ文」より間接的に表現する「オフ・レコード」の度合いが高いということが共通している。しかし、韓国語の「中途終了文」は、会話参加者のフェイスの保持に配慮する「ポライトネスの普遍の原則」や親近感を示す「ポジティブ・ポライトネス」の度合いが高いが、日本語の「中途終了文」にはこのような特徴が見られない。

1. はじめに

依頼などを断わる際に、「不可」を表す主節まで言わずに、残りは相手の判断に委ねる表現（以下「中途終了文」）が用いられることがある。日本語では、理由を表す接続助詞「テ」「ノデ」「カラ」などで終わる文、韓国語では、理由を表す接続語尾「어서 eoseo」などで終わる文がこれに当たる。依頼に対する断わりとして用いられた日韓両言語の「中途終了文」の例を示すと、次のようになる。

(1) その日は用事があって。

(2) 그 날은 일이 있어서 (その日は用事がある + 接続語尾「어서 eoseo」)

生駒・志村(1993)は、日本人は相手の地位が上の場合、顕著に「中途終了文」を使うと指摘し、日本人は「中途終了文」を使うことにより、直接的な断わりを避け、地位が上の人に失礼にならないよう気を付けているとしている (p.47)。(1), (2)の例では、「行けない」「手伝えない」などのような直接的な断わりの内容が省かれ、最終的な判断が聞き手に委ねられている。そのため、聞き手は最終的な判断を下す権利、話を進める主導権が与えられるようになり、ポライトネスとの関連がうかがえる。

しかし、水谷(1991)によれば、日本語母語話者にとって文末を省略する文は丁寧であるのに対

し、英語母語話者は文末を省略しない完全文の方が丁寧であると意識しているという。また、渡辺・鈴木(1981)によれば、「韓国人は相手の要求に応じられないときに、「いいきらない表現」を用いて断わるが、曖昧な言い方よりは、白か黒かをはっきりさせた言い方が好まれる」(p.103)としている。これらの研究から、丁寧さに関する「中途終了文」の評価が言語によって異なることが分かる。

本研究では、ポライトネスの観点から、主節の省略された「中途終了文」と主節が省略されていない「行ケナイ文」および「行カナイ文」という3タイプの文を比較分析し、日本語と韓国語のポライトネスについて考察する¹。

2. ポライトネスの観点

2.1. B&Lのポライトネス理論の概略

Brown and Levinson(1987)(以下、B & L)は、人間には他人によく思われたいという欲求である「ポジティブ・フェイス」と、他人から行動の自由を邪魔されたくないという欲求である「ネガティブ・フェイス」があるとし、フェイスを脅かす行為をface-threatening act(s) (FTA)と呼んでいる。相手のフェイスを傷つけることを避けるために、話し手は「フェイスを脅かす度合い」を計算し、使用可能な「ポライトネス・ストラテジー」(以下、ストラテジー)を選択する。B&L (p.76)は、この「フェイスを脅かす度合い」を「力(Power)」,「社会的距離(Social Distance)」,「負担の度合い(Rx)」という三つの要素から成る公式で示している(日本語訳は筆者)。

(3) $W_x = D(S, H) + P(S, H) + R_x$ (SはSpeaker, HはHearerのことを指す)

W_x : 「フェイスを脅かす度合い」

D : 話し手と聞き手の「社会的距離(Social Distance)」

P : 聞き手(Hearer)の話し手(Speaker)に対する「力(Power)」

R_x : 特定の文化で、ある行為 x が相手にかける「負担の度合い」

B&Lはまた、「フェイス」を脅かす場合のストラテジーを、次ページの図1のように示している(日本語訳は筆者)。(3)の公式によると、「力」「社会的距離」「負担の度合い」の合計が大きいほど、「フェイスを脅かす度合い」が高くなる。また、「フェイスを脅かす度合い」が高いほど、図1の五つのストラテジーのうち、大きい番号のストラテジーが選択される。「フェイスを脅かす度合い」によって五つのストラテジーが序列づけられているわけである。

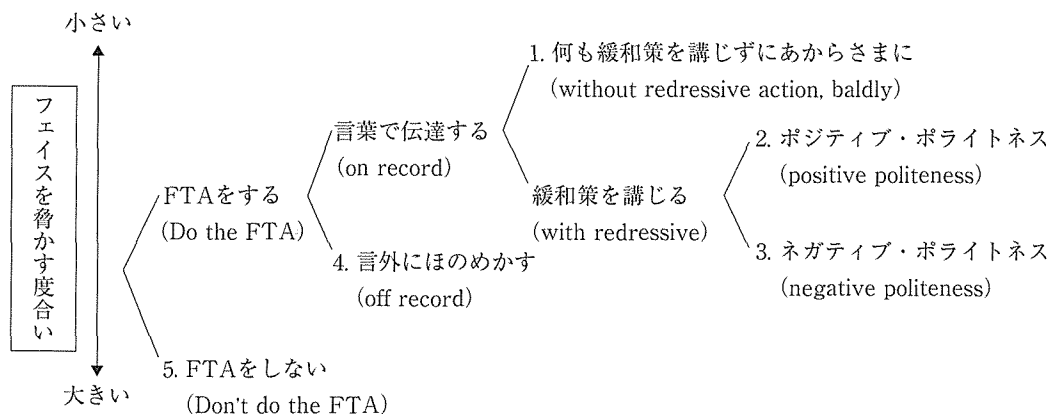


図1 FTAをするときに使用可能なストラテジー

「5. FTA をしない」は、「フェイスを脅かす度合い」が非常に大きいため、敢えて FTA をしないということである。「4. 言外にほのめかす」は、ほのめかしたり、最後まで言わずに省略したりして、その行為をしていることを明確に示さないストラテジーである。

「3. ネガティブ・ポライトネス」は、他人に行動の自由を邪魔されたくないという「ネガティブ・フェイス」を満たすために、敬意を示したり、聞き手の負担を最小限にしたりするストラテジーである。「2. ポジティブ・ポライトネス」は、他人によく思われたいという「ポジティブ・フェイス」を満たすために、相手を褒めたり、仲間内の言葉や愛称などを使ったりして親近感を示すストラテジーである。「1. 何も緩和策を講じずにあからさまに」は、聞き手のフェイスを守ることをせず、あからさまにもの言うストラテジーである。

2.2. 本研究におけるポライトネスの観点

B&L のポライトネスは、五つのストラテジーの中から一つを選択してフェイスを守ることである。また、この五つのストラテジーにはネガティブ・ポライトネス・ストラテジー5「敬意を示せ」、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー4「仲間グループのマーカを用いよ」、オフ・レコード・ストラテジー12「曖昧に表現せよ」など、多様な下位ストラテジーがある。しかし、多様な意味を持つストラテジーのすべてを「フェイスを脅かす度合い」によって序列化できるかどうかは疑問である。

また、B&L の見解では、以下の問題が解決できない。

- [1] 一つの発話に複数の上位ストラテジーが同時に用いられることがある。(Lim Tae-Seop 1988; 강길호 1992; Thomas 1995; 松村 1999 など参照)
- [2] 「フェイスを脅かす度合い」という 1 次元の軸上では、上位ストラテジーを単純に比較できない場合がある。(岡本 1997参照)
- [3] B&L の理論では、ポライトネスの度合いが実証的に示されていないため、日本語と韓

国語におけるストラテジー間、あるいは同一ストラテジー内のポライトネスの度合いを比較できない²。

ストラテジーの多様性と上記の[1], [2]の問題を考慮すると、松村(1999)の指摘にもあるように³, B&Lのポライトネスは「複合的なもの」であり、五つのストラテジーを「フェイスを脅かす度合い」という一つの評価基準の上で常に序列化できるとは限らないことが分かる。ここから、筆者はポライトネスを評価するためには、複数の評価基準が必要であると考ええる。

また、[3]の問題を考慮すると、ポライトネスを評価するためには、複数の評価基準を設けるだけでなく、各評価基準に基づくストラテジーの序列化をせず、それぞれの評価基準で示される度合いを考える方が有効であると考えられる。

さらに、[3]の問題が生じる原因としては、ポライトネスに二つの側面があることが考えられる(詳細は井出 1990; Hwang, Juck-Ryoon 1982; Kasper 1990などを参照)。一つは、ポライトネスの原則に基づき、会話参加者との関係に気を配りつつ、円滑なコミュニケーションを行う広義のポライトネス(B&Lのポライトネスを含む)である。もう一つは、会話参加者の上下関係や社会的規範をわきまえていることを示す狭義のポライトネスである。

井出(1990)は、ポライトネスには「働きかけ方式」と「わきまえ方式」という二つの側面があるとし、日本語と英語のポライトネスを包括する枠組みを設定している。「働きかけ方式」は、冗談など、コミュニケーションを円滑にするために聞き手に働きかけることを指す。これに対し、「わきまえ方式」は、話し手が相手との相対的位置や場面を社会的規範に照らして適切にわきまえていることであり、PD(Perceived Distance)⁴が大きい相手に対しては敬語や婉曲表現などを用い、PDの小さい相手に対してはくだけた表現などを用いることが、「わきまえ方式」による敬語行動であると述べている。また、Hwang, Juck-Ryoon(1982)は politeness と deference の違いを指摘し、politeness は人間関係の接触において葛藤を解消できるストラテジー、deference は社会規範的な要素を表現する敬語現象としている。また、Kasper(1990)は葛藤を避ける戦略としての「戦略的ポライトネス(strategic politeness)」と社会的なわきまへの言語的表現としての「社会的指標としてのポライトネス(politeness as social indexing)」という二つのポライトネスの存在を指摘している⁵。これらの研究では、ポライトネスの原則に基づき、会話参加者との関係に気を配りつつ、円滑なコミュニケーションを行うことを目的とする広義のポライトネスと、会話参加者の上下関係や社会的規範をわきまえていることを示す狭義のポライトネス(以下、「わきまへのポライトネス」とする)という二つのポライトネスの存在が示されている。

日本語、韓国語における二つのポライトネスの関係について指摘している研究としては、井出他(1986)、이기갑(1997)などが挙げられる。井出他(1986)は「アメリカ人にとっては、「わきまえ方式」よりも「働きかけ方式」の比重が大きく、日本人にとってより重要視されるのは、「わきまえ方式」である」(p.27)と述べている。また、이기갑(1997)は「韓国語では、社会的関係が英語より待遇表現により多く反映される」(p.663)と述べている。日本語と同様に、韓国語においても「わきまへのポライトネス」が重視されている。

ポライトネスの二つの側面の比重は言語によって異なるが、実際の言語行動は両方によって成

り立っている場合が多いと考えられる。本研究においても、実際の言語行動におけるポライトネスは、B&Lの言うポライトネスと「わきまへのポライトネス」の両方によって成り立っていると捉える。ここでの「わきまへのポライトネス」は、目上の相手に対しては、敬語や婉曲的表現などの改まった表現を用いるが、友人や目下の相手に対しては、敬語の不使用などの改まっていない表現を用いるといったように、会話参加者の社会的関係や社会的規範によって敬語、呼称、婉曲的表現などを使い分けることとして捉える。

日本語と韓国語のポライトネスと関わる現象をより明確に捉えるには、B&Lの言うポライトネスだけではなく、「わきまへのポライトネス」も同時に評価する必要がある。강길호(1992)は、韓国語の要請の言語行動におけるB&Lのポライトネスを測定するために、また、井出他(1986)は日本語と英語の依頼の敬語行動の「わきまへのポライトネス」を測定するために、それぞれ独自の尺度を用いている⁶。강길호(1992)はB&Lのポライトネスだけに注目しており、井出他(1986)は「わきまへのポライトネス」に限定している。しかし、このポライトネスの二つの側面は、同程度の比重であったり、どちらかの比重が高くなったり、同一の表現で示されたりすることが多いとされており、実際の言語行動のポライトネスの実現においては、片方だけでは成立しないことが多いと思われる。したがって、実際の言語行動のポライトネスを測定する際には、これらを同時に評価することが有効であろう。

2.3. ポライトネスの評価軸

本研究では、上記の議論を踏まえて、日本語と韓国語の言語行動におけるB&Lのポライトネスと「わきまへのポライトネス」の両方を評価するのに有効と予測される「ポライトネスの軸」を提示する。対象は、ポライトな言語行動と関わる「オフ・レコード」、「ポジティブ・ポライトネス」、「ネガティブ・ポライトネス」の三つである⁷。

宇佐美(2003)は、「ポライトネスはどの言語・文化にも共通する「ポライトネスの普遍的原則」を指す場合が多く、各文化に固有なポライトな言語行動を指す場合は、「ポライトネス・ストラテジー」と呼んで、両者の区別を明確にする方が正確である」(p.120)と言う。この知見を本研究に当てはめると、ポライトネスとは日本語と韓国語に共通する普遍的な原則であり、「オフ・レコード」、「ポジティブ・ポライトネス」、「ネガティブ・ポライトネス」の三つのストラテジーは、各言語で具体的に実現されるポライトな言語行動である。具体的なストラテジーの根底には、ポライトネスの普遍的原則があると考えられる。

本研究では、日本語と韓国語の言語行動を規制する2種類のポライトネス、すなわち、B&Lのポライトネスと「わきまへのポライトネス」を評価する軸を設ける（以下、単に「ポライトネス」と言う場合は両方のポライトネスを指すものとする）。

B&Lのポライトネスを測る軸としては、B&Lの挙げる「オフ・レコード」、「ポジティブ・ポライトネス」、「ネガティブ・ポライトネス」の度合いを評価する三つの軸と、これらのストラテジーの根底にある「ポライトネスの普遍的原則」を包括的に評価する一つの軸、合計四つの軸を設ける。

「わきまへのポライトネス」を測る軸としては、表現がどの程度改まっているかを測る井出他(1986)の軸を援用した。井出他(1986)は、敬語行動における「わきまへのポライトネス」を構成する要素として、表現がどの程度改まっているかに関する「言語表現の丁寧さに関するルール」と、相手、場面に応じてどの程度の遇し方をするかに関する「丁寧な行動に関するルール」という二つのルールがあり、敬語行動は以上の二つのルールを適度にかみ合わせて行われるものであると述べている。言語行動における「わきまへのポライトネス」を測るためには、言語表現がどのくらい改まっているかという言語表現そのもののポライトネスだけではなく、相手や場面に応じてどの程度の遇し方をするかという行動のポライトネスも調べる必要があるが、ここでは、井出他(1986)の言う「言語表現の丁寧さに関するルール」を中心に分析することにし、それを「改まりのポライトネス」と呼ぶ。

このように、ポライトネスを測る物差しとして、計五つの軸を設けた。

(4) 〈B&Lのポライトネスを測る軸〉

「ポライトネスの普遍的原則」を測る軸 → 「配慮の軸」

「オフ・レコード」を測る軸 → 「間接性の軸」

「ポジティブ・ポライトネス」を測る軸 → 「親近感の軸」

「ネガティブ・ポライトネス」を測る軸 → 「距離の軸」

〈「わきまへのポライトネス」を測る軸〉

「改まりのポライトネス」を測る軸 → 「改まりの軸」

以下、それぞれの軸について説明する。

【1. 配慮の軸：配慮しない↔配慮する】

ポライトネスとは、会話参加者のフェイスを傷つけないように配慮することである。宇佐美(2003)も、「B&Lのポライトネスの概念は、「対人配慮行動」に最も近い」(p.118)と述べている。先に述べたように、「ポジティブ・ポライトネス」、「ネガティブ・ポライトネス」、「オフ・レコード」という三つのストラテジーの根底には、会話参加者のフェイスの保持に配慮する「ポライトネスの普遍的原則」がある。この「ポライトネスの普遍的原則」の度合いを評価する基準として「配慮の軸」を設ける。

断わりの言語行動の場合、会話参加者の依頼や誘いなどを断わることは、相手の意に沿えないことを示すため、相手のフェイスを傷つけることになる。相手のフェイスを傷つけないよう配慮することは、断わりの言語行動のポライトネスを評価する一つの基準になる。右側の「配慮する」に近いほど、会話参加者のフェイスを傷つけないことに配慮するというポライトネスの普遍的原則の度合いが高くなり、左側の「配慮しない」に近いほどその度合いが低くなる。

【2. 間接性の軸：直接的な↔間接的な】

「オフ・レコード」は言いたいことをはっきりと言い表さないストラテジーである。B&Lによれば、「「オフ・レコード」は本質的に間接的な言語の用法である」(p.211)という。ここでは、「オフ・レコード」を評価する基準として「間接性」を設け、その度合いを測る基準として「間接性の軸」を設ける。

断わりの言語行動は相手の意向に従わないことを示すため、相手のフェイスを傷つける可能性がある。フェイスを守るため、間接的に表現することが必要とされる。断わる意思を婉曲的に表現するか、断わる意思をストレートに表現するかということは、断わりの言語行動のポライトネスを評価するための基準の一つになる。右側の「間接的な」に近いほど「オフ・レコード」の度合いが高くなり、左側の「直接的な」に近いほどその度合いが低くなる。

【3. 親近感の軸：親近感を示さない↔親近感を示す】

B&Lは「「ポジティブ・ポライトネス」を表す発話は、相手との親密さを増す」(p.103)と述べている。このことをふまえ、「ポジティブ・ポライトネス」を評価する基準の一つに「親近感」があると考え、「親近感の軸」を設けた。

断わりの場面でよく用いられる文末表現「ノダ」, 「것 같다 geos gata」は相手への親近感を強く示す表現である⁸。「親近感の軸」は、断わりの言語行動における「ポジティブ・ポライトネス」を評価する基準となる軸の一つである。右側の「親近感を示す」に近いほど「ポジティブ・ポライトネス」の度合いが高くなり、左側の「親近感を示さない」に近いほどその度合いが低くなる。

【4. 距離の軸：距離を置かない↔距離を置く】

B&Lは、「「ネガティブ・ポライトネス」は相手との距離を置くものである」(p.130)と述べている⁹。このことから、相手との「距離」が「ネガティブ・ポライトネス」を評価する基準となると考え、その度合いを測る基準として「距離の軸」を設ける。断わるときにどれほど相手との距離を置くか否かは、断わりの言語行動のポライトネスを評価する一つの基準になる。右側の「距離を置く」に近いほど、「ネガティブ・ポライトネス」の度合いが高くなり、左側の「距離を置かない」に近いほど、その度合いは低くなる。

【5. 改まりの軸：改まっていない↔改まった】

日本語、韓国語では相手や場面に応じて敬語などの改まった表現を用いる場合と、そうでない場合がある。これは「わかまへのポライトネス」に基づくものである。断わりの言語行動の場合、断わるときに相手や場面に応じて改まった表現を用いる場合と、そうでない場合がある。ここでは、個々の言語表現の改まりの度合いを評価するための軸として、井出他(1986)を参考に、改まっているか否かを示す「改まりの軸」を設けた。右側の「改まった」に近いほど、「改まりのポライトネス」の度合いが高くなり、左側の「改まっていない」に近いほどその度合いが低くなる¹⁰。

これら以外にも日韓両言語の断わりの言語行動におけるポライトネスを明らかにできるために役立つ軸が存在するかもしれないが、ここでは、五つの軸に限定して分析を行う。

3. 調査の方法

3.1. 調査の概要

断わりの場面における主節が省略された「中途終了文」は、主節が省略されていない「行ケナイ文」および「行カナイ文」に比べて、ポライトネスを表すかどうかを分析するため、この3タ

イプの文のポライトネスの度合いについて、日韓両言語の母語話者の意識を問う質問紙調査を実施した¹¹。

調査対象者は日韓の大学生・大学院生である。日本語母語話者は日本在住の大学生・大学院生（男性43名、女性52名の計95名、筑波大学）であり、韓国語母語話者は韓国在住の大学生と大学院生（男性56名、女性50名の計106名、釜山大学校、慶北大学校、釜慶大学校）である¹²。

調査は2001年9月から2002年3月の間に行った。

3.2. 調査の内容

両言語の母語話者に「学生Aが教官からの引越しの手伝いの依頼を断わる場面」（以下、教官場面）、「学生Aが友人からの引越しの手伝いを断わる場面」（以下、友人場面）という二つの場면을提示した。日本語母語話者には、各場面で学生Aが用いた「中途終了文」、「行ケナイ文」、「行カナイ文」の印象を五つの「ポライトネスの軸」を用いて評定してもらった。同様に、韓国語母語話者には、韓国語の「것 같다 geos gata 文」、「中途終了文」、「行ケナイ文」、「行カナイ文」の印象を「ポライトネスの軸」で評定するように指示した。

ポライトネスのそれぞれの軸は1を最低とし、5を最高とする。得られた評定値の順位値を求め、文のタイプによって順位値に有意差が見られるかどうか有意差検定を行った。

(5) 「配慮の軸」	配慮しない	1	2	3	4	5	配慮する
「間接性の軸」	直接的な	1	2	3	4	5	間接的な
「親近感の軸」	親近感を示さない	1	2	3	4	5	親近感を示す
「距離の軸」	距離を置かない	1	2	3	4	5	距離を置く
「改まりの軸」	改まっていない	1	2	3	4	5	改まった

調査票には、上記の五つの「ポライトネスの軸」について、次のような説明を示した。

- (6) 「配慮の軸」 相手を傷つけないように最も配慮することを5、最も配慮しないことを1とする。
- 「間接性の軸」 断わる意思を最もストレートに伝えることを1、断わる意思を最も婉曲的に伝えることを5とする。
- 「親近感の軸」 最も親近感を示さないことを1、最も親近感を示すことを5とする。
- 「距離の軸」 最も距離を置かないことを1、最も距離を置くことを5とする。
- 「改まりの軸」 最も改まっていないことを1、最も改まっていることを5とする。

以下、それぞれの軸で評定された数値を「配慮度」「間接度」「親近度」「距離度」「改まり度」と呼ぶ。

この調査で挙げたすべての調査項目を、次ページの表1にまとめて示す¹³。

日本語の場合、四つのタイプの文（「行ケナイ文」、「行カナイ文」、「中途終了文」、「ノダ」文）と三つの接続助詞（「テ」、「ノデ」、「カラ」）を組み合わせた12項目を、教官場面と友人場面という二つの場面で設けた。教官場面でのすべての項目はデスマス体、友人場面でのすべての項目はダ体とした。

韓国語では、四つのタイプの文（「中途終了文」、「行ケナイ文」、「行カナイ文」、「것 같다 geos gata」文）と一つの接続語尾（「어서 eoseo」）を組み合わせた項目を、教官場面と友人場面という二つの場面で設けた。

表1 調査項目

教官場面	友人場面
①その日は用事がありまして、行けません。 ②その日は用事がありますので。 ③その日は用事がありまして、行きません。 ④その日は用事がありますので、行けないんです。 ⑤その日は用事がありまして。 ⑥その日は用事がありますから、行きません。 ⑦その日は用事がありまして、行けないんです。 ⑧その日は用事がありますから、行けません。 ⑨その日は用事がありますので、行きません。 ⑩その日は用事がありますから、行けないんです。 ⑪その日は用事がありますので、行けません。 ⑫その日は用事がありますから。	①その日は用事があって、行けない。 ②その日は用事があるので。 ③その日は用事あって、行かない。 ④その日は用事があるので、行けないんだ。 ⑤その日は用事あって。 ⑥その日は用事があるから、行かない。 ⑦その日は用事あって、行けないんだ。 ⑧その日は用事があるから、行けない。 ⑨その日は用事があるので、行かない。 ⑩その日は用事があるから、行けないんだ。 ⑪その日は用事があるので、行けない。 ⑫その日は用事があるから。
教官場面	友人場面
① 그날은 일이 있어서 못 갑니다. (その日は用事がある+接続語尾「어서 eoseo」+行けない+終結語尾「ㅂ니다 bnida」) [+ RESPECT, + FORMAL Speech Level] ② 그날은 일이 있어서 못 가요. (その日は用事がある+接続語尾「어서」+行けない+終結語尾「아요 ayo」) [+ RESPECT, - FORMAL Speech Level] ③ 그날은 일이 있어서 안 갑니다. (その日は用事がある+接続語尾「어서」+行かない+終結語尾「ㅂ니다」) [+ RESPECT, + FORMAL Speech Level] ④ 그날은 일이 있어서 안 가요. (その日は用事がある+接続語尾「어서」+行かない+終結語尾「아요」) [+ RESPECT, - FORMAL Speech Level] ⑤ 그날은 일이 있어서요. (その日は用事がある+接続語尾「어서」+終結語尾「요 yo」) ⑥ 그날은 일이 있어서 못 갈 것 같습니다. (その日は用事がある+接続語尾「어서」+行けない+「것 같다 geos gata」+終結語尾「습니다 seubnida」) [+ RESPECT, + FORMAL Speech Level] ⑦ 그날은 일이 있어서 못 갈 것 같아요. (その日は用事がある+接続語尾「어서」+行けない+「것 같다」+終結語尾「아요」) [+ RESPECT, - FORMAL Speech Level]	① 그날은 일이 있어서 못 가. (その日は用事がある+接続語尾「어서」+行けない+終結語尾「아 a」) [- RESPECT, + FORMAL Speech Level] ② 그날은 일이 있어서 안 가. (その日は用事がある+接続語尾「어서」+行かない+終結語尾「아」) [- RESPECT, + FORMAL Speech Level] ③ 그날은 일이 있어서. (その日は用事がある+接続語尾「어서」) ④ 그날은 일이 있어서 못 갈 것 같아. (その日は用事がある+接続語尾「어서」+行けない+「것 같다」+終結語尾「아」) [- RESPECT, + FORMAL Speech Level]

韓国語のスピーチレベルは、教官場面では、格式的尊待 [+ RESPECT, + FORMAL] と非格式的尊待 [+ RESPECT, - FORMAL], 友人場面では、格式的非尊待 [- RESPECT, + FORMAL] を設けた¹⁴。教官場面での「짓 갈다 geos gata 文」, 「行ケナイ文」, 「行カナイ文」のスピーチレベルは格式的尊待 [+ RESPECT, + FORMAL] と非格式的尊待 [+ RESPECT, - FORMAL] の二つであるが, 「中途終了文」のスピーチレベルは非格式的尊待のみであるため¹⁵, 7 項目を設けた。友人場面での四つのタイプの文のスピーチレベルはすべて格式的非尊待 [- RESPECT, + FORMAL] であるため, 4 項目を設けた。

4. 調査の結果分析および考察(1)—日本語の3タイプの文の比較分析—

4.1. 教官場面の結果分析および考察

表1で取り上げた調査項目のうち, ここでは, 従属節については「テ」, 「ノデ」, 「カラ」の三つ, 主節については「行カナイ文」, 「行ケナイ文」, 「中途終了文」の三つをそれぞれ組み合わせた合計九つの文を取り上げる。以下では, この九つの文を主節の違いによって三つのグループに分け, この3グループ間の「ポライトネスの軸」の評定値を比較分析する¹⁶。下記の文の番号は, 表1による。

(7) 従属節が「テ」, 「ノデ」, 「カラ」で終わる「行カナイ文」グループ：文③⑥⑨

従属節が「テ」, 「ノデ」, 「カラ」で終わる「行ケナイ文」グループ：文①⑧⑪

従属節が「テ」, 「ノデ」, 「カラ」で終わる「中途終了文」グループ：文②⑤⑫

まず, 主節の違いによる3グループ間の配慮度, 間接度, 親近度, 距離度, 改まり度に違いがあるかを検証する。教官場面での3グループのフリードマン検定の結果を次の表2に示す。

表2 フリードマン検定による日本語の3グループ間の比較(教官場面)

グループ	統計量	配慮度	間接度	親近度	距離度	改まり度
「行カナイ文」グループ	平均順位	1.19	1.20	1.50	1.63	1.36
「行ケナイ文」グループ	平均順位	2.48	2.07	2.29	2.16	2.44
「中途終了文」グループ	平均順位	2.33	2.73	2.20	2.21	2.20
	Chi-Square	317.658	370.109	127.423	73.018	213.510
	df	2	2	2	2	2
	有意確率	.000	.000	.000	.000	.000
	有意差判定	***	***	***	***	***

***:0.1%水準で有意, **:1%水準で有意, *:5%水準で有意, -:有意差なし

上記の3グループ間の配慮度, 間接度, 親近度, 距離度, 改まり度に差があるかを0.1%水準で検定したところ, 全体として有意差があることが認められた ($p \leq .001$)。したがって, 全体としては, 3タイプの文の配慮度, 間接度, 親近度, 距離度, 改まり度に差があると言える。

また, どのグループの組み合わせに有意差があるかを検証するためにスティール・ドゥワス検定による多重比較法を用いた。3グループの各々の組み合わせでの検定統計量, 有意確率, 有意

差の判定結果を示すと、次の表3のようになる。

表3 多重比較による日本語の3グループ間の比較（教官場面）

	配慮度	間接度	親近度	距離度	改まり度
「行カナイ文」VS.「行ケナイ文」	-17.130	-13.881	-10.940	-7.507	-14.507
有意確率	.000	.000	.000	.000	.000
有意差の判定	***	***	***	***	***
「行カナイ文」VS.「中途終了文」	-15.643	-18.79	-8.920	-7.844	-11.435
有意確率	.000	.000	.000	.000	.000
有意差の判定	***	***	***	***	***
「行ケナイ文」VS.「中途終了文」	1.084	-12.538	1.289	-1.685	3.622
有意確率	.524	.000	.401	.211	.000
有意差の判定	—	***	—	—	***

***:0.1%水準で有意, **:1%水準で有意, *:5%水準で有意, -:有意差なし

「行カナイ文」と「行ケナイ文」,「行カナイ文」と「中途終了文」では、五つの「ポライトネスの軸」の評定値に0.1%水準で有意差があることが認められた ($p \leq .001$)。「行ケナイ文」と「中途終了文」では、間接度,改まり度に0.1%水準で有意差があることが認められた ($p \leq .001$)。

表2および表3の検定結果をまとめて示すと、以下の表4になる。

表4 日本語の3グループのポライトネスの度合いの序列（教官場面）

軸	場面
配慮度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」=「中途終了文」
間接度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」<「中途終了文」
親近度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」=「中途終了文」
距離度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」=「中途終了文」
改まり度	「行カナイ文」<「中途終了文」<「行ケナイ文」

(「=」は有意差がないことを示す)

表4を見ると、「行ケナイ文」および「中途終了文」は、「行カナイ文」より五つの「ポライトネスの軸」の評定値が高く、ポライトネスの度合いがより高い表現であることが分かる。「行カナイ文」は断わる旨を自分の意志としてあからさまに表す表現であるため、事情によってやむを得ず断わらざるを得ないことを示す「行ケナイ文」や、断わりの事情だけ説明し、断わりの意志を表す部分を省略した「中途終了文」よりポライトネスの度合いが低く評定されたと考えられる。

次に、双方とも「ポライトネスの軸」の評定値が高かった「中途終了文」と「行ケナイ文」を比較すると、「中途終了文」は「行ケナイ文」より間接度は高いが、改まり度は低くなっている。

そのため、全体としてはどの文がポライトであるとは単純に決められないところがあるが、ポライトネスの五つの側面から個別に見ることで、次のようなことが明らかになった。

「中途終了文」は間接的に表現する「オフ・レコード」の度合いが高いのに対し、「行ケナイ文」は改まりを示す「改まりのポライトネス」の度合いが高い。「中途終了文」が「行ケナイ文」より間接度が高く評定されたのは、断わりの事情を説明した上で相手の意を受け入れることが不可能であることを表す「行ケナイ文」に比べ、「中途終了文」は相手の意に沿えないことを表す主節が省略されているためと考えられる。

また、「中途終了文」が「行ケナイ文」より改まり度が低いことは、次のように考えることができる。「行ケナイ文」は、主節が「行けません」というデスマス体のスピーチレベルで終わる文である。デスマス体は、通常改まった態度で接する目上の者に対する場面などに適しているスピーチレベルである。これに対し、「中途終了文」はデスマス体であることを示す主節が省略されているため、「行ケナイ文」よりデスマス体であることが必ずしも強調されない。そのため、デスマス体であることが明示的に示されている「行ケナイ文」より「中途終了文」の改まり度が低く評定されたと考えられる。

4.2. 友人場面の結果分析および考察

次に、友人場面において、(7)で示した3グループの文の間に「ポライトネスの軸」の評定値に違いがあるかどうかをフリードマン検定で検証した。その結果を次の表5に示す。

表5 フリードマン検定による日本語の3グループ間の比較（友人場面）

グループ	統計量	配慮度	間接度	親近度	距離度	改まり度
「行カナイ文」グループ	平均順位	1.16	1.16	1.47	1.88	1.44
「行ケナイ文」グループ	平均順位	2.40	2.05	2.36	1.86	2.22
「中途終了文」グループ	平均順位	2.44	2.79	2.17	2.26	2.34
	Chi-Square	349.402	415.737	147.793	34.904	163.481
	df	2	2	2	2	2
	有意確率	.000	.000	.000	.000	.000
	有意差判定	***	***	***	***	***

***:0.1%水準で有意, **:1%水準で有意, *:5%水準で有意, -:有意差なし

上記の三つのグループの配慮度、間接度、親近度、距離度、改まり度に差があるかを0.1%水準で検定したところ、全体として有意差が認められた ($p \leq .001$)。したがって、全体としては3タイプの文の配慮度、間接度、親近度、距離度、改まり度に差があると言える。

また、どのグループ間に有意差があるかを検証するために、スティール・ドゥワース検定による多重比較法を用いた。3グループの各々の組み合わせでの判定結果を示すと、次ページの表6のようになる。

「行カナイ文」と「行ケナイ文」では、距離度以外の「ポライトネスの軸」の評定値に0.1%水

準で有意差があることが認められた ($p \leq .001$)。「行カナイ文」と「中途終了文」では、五つの「ポライトネスの軸」の評定値に0.1%水準で有意差があることが認められた ($p \leq .001$)。「行ケナイ文」と「中途終了文」では、間接度、距離度に0.1%水準で有意差があり ($p \leq .001$)、改まり度に1%水準で有意差があることが認められた ($p \leq .01$)。

表6 多重比較による日本語の3グループ間の比較（友人場面）

	配慮度	間接度	親近度	距離度	改まり度
「行カナイ文」VS.「行ケナイ文」	-17.316	-15.800	-11.920	-0.836	-10.809
有意確率	.000	.000	.000	.681	.000
有意差の判定	***	***	***	—	***
「行カナイ文」VS.「中途終了文」	-17.479	-20.040	-10.045	-5.625	-11.952
有意確率	.000	.000	.000	.000	.000
有意差の判定	***	***	***	***	***
「行ケナイ文」VS.「中途終了文」	-1.693	-13.711	2.311	-6.647	-2.986
有意確率	.208	.000	.054	.000	.008
有意差の判定	—	***	—	***	**

***:0.1%水準で有意, **:1%水準で有意, *:5%水準で有意, -:有意差なし

表5 および表6の検定結果をまとめて示すと、以下の表7になる。

表7 日本語の3グループのポライトネスの度合いの序列（友人場面）

軸	場面
配慮度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」=「中途終了文」
間接度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」<「中途終了文」
親近度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」=「中途終了文」
距離度	「行カナイ文」=「行ケナイ文」<「中途終了文」
改まり度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」<「中途終了文」

表7を見ると、「行ケナイ文」および「中途終了文」に比べ、「行カナイ文」は距離度には有意差がない場合があるものの、全体としては「ポライトネスの軸」の評定値が低いことが分かる。

「行カナイ文」と「行ケナイ文」の距離度に有意差がない理由は、「距離の軸」における距離の定義が曖昧だったこと、調査票の提示方法が調査対象者の誤解を招くようなものであったことが影響している可能性がある。ここで言う「距離」はB&Lの「社会的距離」を指すが、B&Lの「社会的距離」の定義が明確ではないため、相手との相互作用の頻度が低いことから感じられる距離や、相手のことを好ましく思わないなどの心情的な距離など、多様な意味が読み取れる。本調査を行う際には、それによる混乱を避けるために、「距離の軸」を「距離を置かない↔置く」と説明したが、調査対象者はやはり「距離を置く」という言葉に多様な意味を連想したかもしれない。

次に、双方とも「ポライトネスの軸」の評定値が高かった「中途終了文」と「行ケナイ文」を比較すると、配慮度、親近度には有意差がないものの、「中途終了文」は「行ケナイ文」より間接度、距離度、改まり度が高い。つまり、間接的に表現する「オフ・レコード」、距離を置く「ネガティブ・ポライトネス」、改まりを示す「改まりのポライトネス」の度合いが高い。「中途終了文」は相手の意に沿えないことを表す主節が省略されているため、「行ケナイ文」より間接度が高く評定されたと考えられる。また、「中途終了文」が「行ケナイ文」より距離度や改まり度が高いことについては、次のように考えることができる。ダ体は主に同等の友人や目下に対して用いるスピーチレベルであるため、距離を置かず、かつ改まっていない場面に相応しいスピーチレベルである。そのため、ダ体であることが明示的に示されている「行ケナイ文」よりダ体の主節が省略されている「中途終了文」の方が距離度や改まり度が高く評定されたと考えられる。以上のことから、全体としては、「中途終了文」>「行ケナイ文」>「行カナイ文」の順にポライトネスの度合いが高く評定されたと考えられる。

4.3. 場面間の比較および考察

日本語の教官場面と友人場面の間の比較をすると、次のような傾向が見られる。

まず、3タイプの文のグループ間の比較をすると、配慮度、間接度、親近度は場面による違いが見られない。しかし、距離度、改まり度は場面による違いが大きいことが注目される。

改まり度に関しては、教官場面では「行ケナイ文」が「中途終了文」より高くなっているのに対し、友人場面では「中途終了文」が「行ケナイ文」より高くなっている。教官場面での「行ケナイ文」は主節に敬語であるデスマス体が用いられているため、改まった表現である。これに対し、「中途終了文」は主節にデスマス体が省略されているため、改まり度は低くなり、そのため、教官場面での「行ケナイ文」の改まり度が高く評定されたと考えられる。友人場面での「行ケナイ文」は、主節に敬語の不使用を表すダ体が用いられているため、改まっていない表現である。これに対し、「中途終了文」は主節が省略されているため、スピーチレベルがダ体であることが必ずしも強調されない。そのため、友人場面での「中途終了文」の方が「行ケナイ文」より改まり度が高く評定されたと考えられる。

距離度に関しては、教官場面での「行ケナイ文」と「中途終了文」の距離度に違いがなかったが、友人場面では「中途終了文」の方が「行ケナイ文」より距離度が高くなっている。友人場面では、断わる意向を明言せず、省略している「中途終了文」が距離を置く表現と感じられたために、距離度が高く評定されたと考えられる。

5. 調査の結果分析および考察(2)―韓国語の3タイプの文の比較分析―

5.1. 教官場面の結果分析および考察

非格式的尊待スピーチレベルの「行カナイ文」、「行ケナイ文」、「中途終了文」の間の配慮度、間接度、親近度、距離度、改まり度に違いがあるかを検証するため、フリードマン検定を行った。その結果を示すと、次ページの表8のようになる。

表8 フリードマン検定による非格式的尊待の3タイプの文の比較(教官場面)

	統計量	配慮度	間接度	親近度	距離度	改まり度
④ 그날은 일이 있어서 안 가요. (行カナイ文)	平均順位	1.14	1.22	1.33	1.94	1.46
② 그날은 일이 있어서 못 가요. (行ケナイ文)	平均順位	2.18	2.06	2.08	2.02	2.21
⑤ 그날은 일이 있어서요. (中途終了文)	平均順位	2.67	2.72	2.59	2.04	2.33
	Chi-Square	150.120	139.884	100.265	.762	58.012
	df	2	2	2	2	2
	有意確率	.000	.000	.000	.683	.000
	有意差判定	***	***	***	—	***

***:0.1%水準で有意, **:1%水準で有意, *:5%水準で有意, -:有意差なし

上記の3タイプの文の間に配慮度, 間接度, 親近度, 距離度, 改まり度に違いがあるかを0.1%水準で検定したところ, 距離度には有意差がなかったが, 配慮度, 間接度, 親近度, 改まり度には有意差があることが認められた($p \leq .001$)。したがって, 全体としては3タイプの文の配慮度, 間接度, 親近度, 改まり度に差があると言える。

また, どのタイプの文の組み合わせに有意差があるかを検証するため, スティール・ドゥワス検定による多重比較法を用いた¹⁷⁾。3タイプの文の各々の組み合わせでの判定結果を示すと, 表9のようになる。

表9 多重比較による非格式的尊待の3タイプの文の比較(教官場面)

	配慮度	間接度	親近度	改まり度
「行カナイ文」VS.「行ケナイ文」	-9.457	-8.044	-6.415	-6.101
有意確率	.000	.000	.000	.000
有意差の判定	***	***	***	***
「行カナイ文」VS.「中途終了文」	-12.147	-12.304	-9.560	-8.542
有意確率	.000	.000	.000	.000
有意差の判定	***	***	***	***
「行ケナイ文」VS.「中途終了文」	-5.436	-7.032	-4.796	-1.873
有意確率	.000	.000	.000	.147
有意差の判定	***	***	***	—

***:0.1%水準で有意, **:1%水準で有意, *:5%水準で有意, -:有意差なし

「行カナイ文」と「行ケナイ文」, 「行カナイ文」と「中途終了文」では, 配慮度, 間接度, 親近度, 改まり度に0.1%水準で有意差があることが認められた($p \leq .001$)。「行ケナイ文」と「中途終了文」では, 配慮度, 間接度, 親近度に0.1%水準で有意差があることが認められた($p \leq .001$)。

表8および表9の検定結果をまとめて示すと, 次の表10のようになる。

表10 韓国語の3グループのポライトネスの度合いの序列(教官場面)

軸	場面
配慮度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」<「中途終了文」
間接度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」<「中途終了文」
親近度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」<「中途終了文」
改まり度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」=「中途終了文」

表10を見ると、「行ケナイ文」および「中途終了文」は「行カナイ文」と距離度に有意差がないものの、配慮度、間接度、親近度、改まり度が高い傾向があることが分かる。3タイプの文の距離度に有意差がないのは、先に述べたように、「距離の軸」の定義が曖昧で、調査票の提示が調査対象者の誤解を招くようなものであったからと考えられる。

次に、双方とも「ポライトネスの軸」の評定値が高かった「行ケナイ文」と「中途終了文」を比較すると、距離度、改まり度には有意差が見られなかったが、配慮度、間接度、親近度は「中途終了文」の方が高くなっている。「中途終了文」は、「行ケナイ文」より相手のフェイスの保持に配慮するという「ポライトネスの普遍の原則」、間接的に表現する「オフ・レコード」、親近感を示す「ポジティブ・ポライトネス」の度合いが高いと言える。全体としては「中途終了文」>「行ケナイ文」>「行カナイ文」の順にポライトネスの度合いが高いと考えられる。

5.2. 友人場面の結果分析および考察

格式的非尊待スピーチレベルの「行カナイ文」、「行ケナイ文」、「中途終了文」の配慮度、間接度、親近度、距離度、改まり度に違いがあるかを検証するためフリードマン検定を用いた。その結果を示すと、下記の表11ようになる。

表11 フリードマン検定による格式的非尊待の3タイプの文の比較(友人場面)

格式的非尊待スピーチレベル	統計量	配慮度	間接度	親近度	距離度	改まり度
② 그날은 일이 있어서 안 가. (行カナイ文)	平均順位	1.14	1.20	1.29	1.85	1.36
① 그날은 일이 있어서 못 가. (行ケナイ文)	平均順位	2.23	2.05	2.15	2.01	2.10
③ 그날은 일이 있어서. (中途終了文)	平均順位	2.63	2.75	2.56	2.14	2.54
	Chi-Square	137.362	141.580	101.134	5.206	86.984
	df	2	2	2	2	2
	有意確率	.000	.000	.000	.074	.000
	有意差判定	***	***	***	—	***

***:0.1%水準で有意, **:1%水準で有意, *:5%水準で有意, -:有意差なし

上記の3タイプの文の配慮度、間接度、親近度、距離度、改まり度に違いがあるかどうかを0.1%水準で検定したところ、配慮度、間接度、親近度、改まり度に有意差があることが認めら

れた ($p \leq .001$)。距離度には有意差がなかった。したがって、全体としては3タイプの文の配慮度、間接度、親近度、改まり度に差があると言える。

また、どの文の間に有意差があるかをスティール・ドゥワース検定による多重比較で検証した。その結果を次の表12に示す。

表12 多重比較による格式的非尊待の3タイプの文の比較（友人場面）

	配慮度	間接度	親近度	改まり度
「行カナイ文」VS.「行ケナイ文」	-9.400	-8.334	-7.198	-6.333
有意確率	.000	.000	.000	.000
有意差の判定	***	***	***	***
「行カナイ文」VS.「中途終了文」	-12.466	-12.868	-9.921	-9.564
有意確率	.000	.000	.000	.000
有意差の判定	***	***	***	***
「行ケナイ文」VS.「中途終了文」	-4.284	-7.530	-3.832	-4.224
有意確率	.000	.000	.000	.000
有意差の判定	***	***	***	***

***:0.1%水準で有意, **:1%水準で有意, *:5%水準で有意, -:有意差なし

「行カナイ文」と「行ケナイ文」,「行カナイ文」と「中途終了文」,「行ケナイ文」と「中途終了文」では、配慮度、間接度、親近度、改まり度に0.1%水準で有意差があることが認められた ($p \leq .001$)。表11および表12の検定結果をまとめて示すと、次の表13ようになる。

表13 韓国語の3グループのポライトネスの度合いの序列（友人場面）

軸	場面
配慮度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」<「中途終了文」
間接度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」<「中途終了文」
親近度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」<「中途終了文」
改まり度	「行カナイ文」<「行ケナイ文」<「中途終了文」

表13を見ると、3グループの距離度には有意差がないものの、「中途終了文」>「行ケナイ文」>「行カナイ文」の順に配慮度、間接度が高くなることが分かる。したがって、全体としては、「中途終了文」>「行ケナイ文」>「行カナイ文」の順にポライトネスの度合いが高いと言える。

5.3. 場面間の比較および考察

韓国語の教官場面と友人場面を比較すると、「行カナイ文」と「行ケナイ文」の組み合わせ、「行カナイ文」と「中途終了文」の組み合わせの分析結果は、ほとんど同じである。「行ケナイ文」および「中途終了文」は、「行カナイ文」よりポライトネスの度合いが高い表現であると言える。

しかし、「行ケナイ文」と「中途終了文」の組み合わせでは、配慮度、間接度、親近度、距離度の結果は同じであるが、改まり度の結果には違いが見られる。教官場面では「行ケナイ文」と「中途終了文」の改まり度に違いがなかったが、友人場面では「中途終了文」は「行ケナイ文」より改まり度が高くなっている。このことから、改まり度は場面に影響されやすいことが分かる。

6. 日韓両言語の比較および考察

日本語と韓国語の「中途終了文」は、「行カナイ文」より配慮度、間接度、親近度、改まり度が高い点が共通している。ここから、両言語の「中途終了文」は「行カナイ文」よりポライトネスの度合いが高い表現であると言える。また、「行ケナイ文」および「行カナイ文」に比べ、日韓両言語の「中途終了文」は間接度が高く、間接的に表現する「オフ・レコード」の度合いが高い点も共通している。

しかし、韓国語の「中途終了文」は会話参加者のフェイスの保持に配慮する「ポライトネスの普遍の原則」、親近感を示す「ポジティブ・ポライトネス」の度合いが高いのに対し、日本語の「中途終了文」にはこのような特徴が見られない。水谷(1991)では、日本語の「中途終了文」と丁寧さとの関連が指摘されているが、ここでの「丁寧さ」は間接度が高いことを示していると考えられる。渡辺・鈴木(1981)は、韓国語では相手の要求に応じられないときに、はっきり断わることが好まれるとしているが、本研究では、この指摘とは異なり、韓国語の「中途終了文」は、会話参加者のフェイスを保持することに配慮を示し、間接的かつ親近感を示す表現であることが明らかになった。換言すれば、韓国語の「中途終了文」は、「行ケナイ文」よりも、会話参加者のフェイスを保持することに配慮する「ポライトネスの普遍の原則」、間接的に表現する「オフ・レコード」、親近感を示す「ポジティブ・ポライトネス」の度合いが高いという特徴を示している。

一方、日本語の「中途終了文」の場合、両場面で「行ケナイ文」に比べ、間接度は高くなっているが、配慮度には有意差がないという結果が得られた。間接度が高くなれば、配慮度も高くなることが予測されたが、調査結果はそれとは逆であった。

その理由としては、二つのことが考えられる。一つは、「可能表現の否定文」には、「中途終了文」と同程度の配慮度が込められていることが考えられる¹⁸。「否定の可能文の場合には、動作主体の期待(意志)はあくまで動作を実行することであり、その実現が何らかの条件によって阻まれることを表す」(渋谷 1993: p.237)という指摘を踏まえると、断わりの場面での「可能表現の否定文」の使用は、自分の意志とは無関係に実現を妨げる条件があるためにそれを実行することが不可能であることを表し、それが会話参加者のフェイスを守る配慮につながると考えられる。これは自分の意志で行かないことを示す「行カナイ文」の配慮度が非常に低いこととは対照的である。

もう一つの理由は、質問紙調査における音声情報の欠如である。洪珉杓(1994)は、音声がポライトネスに与える影響が大きいことを指摘している。文字で書かれている場合、「中途終了文」

は文末が完結していない文章として形式的に完全なものではないのに対して、「行ケナイ文」は文章として完結しているため、両者の配慮度の評定に影響を与えたのではないと思われる。

7. まとめ

本稿では、日韓両言語の「中途終了文」、「行ケナイ文」、「行カナイ文」を「ポライトネスの軸」によって比較分析し、次のような結果を得た。

教官場面と友人場面における日本語の「行ケナイ文」および「中途終了文」は、「行カナイ文」よりポライトネスの度合いが高い表現である。教官場面での日本語の「中途終了文」と「行ケナイ文」のどちらがポライトであるかは単純には言えないが、ポライトネスの五つの側面から個別に見ていくと、「中途終了文」は間接的に表現する「オフ・レコード」の度合いが高いのに対し、「行ケナイ文」は改まりを示す「改まりのポライトネス」の度合いが高い。これに対し、友人場面では、全体としては「中途終了文」は「行ケナイ文」よりポライトネスの度合いが高く、特に間接的に表現する「オフ・レコード」、距離を置く「ネガティブ・ポライトネス」、改まりを示す「改まりのポライトネス」の度合いが高い。したがって、全体としては、「中途終了文」は「行ケナイ文」よりポライトネスの度合いが高い表現であると考えられる。

一方、教官場面と友人場面での韓国語の「中途終了文」は「行ケナイ文」よりポライトネスの度合いが高い表現である。特に教官場面での「中途終了文」は、「行ケナイ文」より相手のフェイスの保持に配慮する「ポライトネスの基本的原則」、間接的に断わる「オフ・レコード」、親近感を示す「ポジティブ・ポライトネス」の度合いが高い。友人場面での韓国語の「中途終了文」は、これに加え、改まりを示す「改まりのポライトネス」の度合いが高いという特徴がある。

場面間の違いを分析すると、日本語では、3タイプの文の配慮度、間接度、親近度には場面差があまり見られないが、距離度、改まり度は場面差が大きい。韓国語では、配慮度、間接度、親近度、距離度には場面差が見られないが、改まり度は場面差が大きい。日韓両言語ともに、改まりを示す「改まりのポライトネス」は場面に影響されやすいと考えられる。

日韓両言語を比較すると、日韓両言語の「中途終了文」および「行ケナイ文」は、「行カナイ文」よりポライトネスの度合いが高い。また、両言語の「中途終了文」は、「行ケナイ文」より間接的に表現する「オフ・レコード」の度合いが高い。しかし、韓国語の「中途終了文」は、「ポライトネスの普遍的原則」や「ポジティブ・ポライトネス」の度合いが高いが、日本語の「中途終了文」にはこのような特徴が見られない。

本稿では、従属節が理由を表す接続助詞、接続語尾で終わる日韓両言語の「中途終了文」を中心に分析したが、今後は、「今日はちょっと…」のような述部が省略された「中途終了文」などの多様な形式の「中途終了文」の分析や、実際の談話の中で「中途終了文」の使われ方やポライトネスの度合いの認識の調査を行う必要があろう。

注

- 1 依頼や誘いに対する断わりとしてほとんど用いられることがないと思われる「行カナイ文」を比較対象とした理由は、自分の意志で行かないことを明言し、ほとんどポライトネスを表さない「行カナイ文」を比較の基準として、「中途終了文」および「行ケナイ文」が相対的にどのくらいポライトネスを表すかを明らかにするためである。
- 2 [3]の問題は、次の二つの批判をもとにしている。一つは、「B&Lでは、ポライトネスの度合いが実証的に示されていない」(Fraser 1990; 岡本 1997)という批判である。もう一つは、「B&Lの理論では敬語体系を有する言語における言語使用がうまく説明されていない」(Matsumoto 1989; 宇佐美 1993など)という批判である。
- 3 松村(1999)は、日本語の会話で観察されたポライトネスは、「相手に対する敬意を表現しつつも親しみを込めるといように複合的なもの」(p.58)であるとしている。また、B&Lのポライトネス理論のように、「フェイスを脅かす度合いを、「距離」、「力」、「負担の度合い」の和から算出し、その和が大きいほど、FTAをより小さくできる戦略が選択されるという単純な図式化ができない」(p.58)としている。
- 4 井出他(1986)はPDとはわきまを規定するものであり、社会的地位、力関係、年齢などにより生じる距離、親疎関係、場面や話題の改まりの度合い、相手への負担度などであると述べている。
- 5 同様の見解を示している研究として、Fraser(1990), 이기갑(1997)などが挙げられる。
- 6 강길호(1992)は次の七つの尺度を用いている(日本語訳は筆者)。「恭遜に－不遜に」(공손하게－불손하게), 「礼儀正しく－無礼に」(예의바르게－무례하게), 「迂回的に－単刀直入に」(우회적으로－단도직입적으로), 「気分を害さないように－気分を害するように」(기분을 상하지 않게－비위를 거슬리게), 「不快感を与えない方式で－不快感を与える方式で」(불쾌감을 주지 않는 방식으로－불쾌감을 주는 방식으로)を用いている。しかし、これらの尺度を設けた理由は述べられていない。一方、井出他(1986)は「気楽な－改まった」という尺度を用いている。
- 7 宇佐美(2002)は、「ポライトな言語行動の分析は「ポジティブ・ポライトネス」、「ネガティブ・ポライトネス」、「オフ・レコード」の三つが中心となっている」(p.102)と述べている。B&Lの中で、ポライトネスと関わらないとされる「何も緩和策を講じずにあからさまに」、非言語行動である「FTAをしない」は対象にしない。
- 8 元智恩(2003b)では、「[「ノダ」文と「것 같다 geos gatda」文は、それらのつかない文に比べ、より配慮した表現であり、間接的かつ親近感を強く示す表現であるという印象が共通している」(p.60)と述べた。
- 9 B&Lの「社会的距離(social distance)」を指す。これは話し手と聞き手に対称的な社会的次元で、相互作用の頻度や交換される物質・非物質の種類に基づくものであるという。この「社会的距離」には「心理的距離」も含まれている可能性があるが、B&Lの枠組みでは、「心理的距離」という概念が明確にされていない。予備調査の際、「社会的距離」という言葉の意味が分からないという意見が多かったため、social distanceを「社会的距離」と直訳せず「距離」という言葉を用いた。
- 10 井出他(1986)は、日英語の敬語行動における「わきまのポライトネス」を測る尺度の両極を示す言葉として「気楽な」、「改まった」を用いている。しかし、「気楽な」と「改まった」が反対の意を成しているという保証はないため、本研究では、これを「改まっていない↔改ま

った」とした。

- 11 この調査の分析結果は日韓両言語におけるあらゆる「中途終了文」に当てはまるものではなく、あくまでもここで取り上げた文に限って見られた結果であることを断わっておく。以下でいう日韓両言語の「中途終了文」も調査文として用いたものを指す。
- 12 調査対象者の性別、年齢、出身地域が分析結果に影響を与える可能性があると考えられるが、本研究では、分析の際、調査対象者の性別、年齢、出身地域は考慮に入れない。
- 13 接続助詞「テ」、「ノデ」、「カラ」を含む「ノダ」文（教官の依頼を断わる場面の文④、⑦、⑩および友人の依頼を断わる場面の文④、⑦、⑩）と韓国語の「것 같다 geos gata」文（教官の依頼を断わる場面の文⑥、⑦および友人の依頼を断わる場面の文④）も項目の中に入っているが、これらの分析は元智恩(2003b)で論じた。
- 14 韓国語のスピーチレベルの分類をめぐっては4段階説、5段階説、6段階説があるが、ここでは、서정수(1984)の4段階説を取り入れ、この議論には深く立ち入らないことにする。
- 15 教官場面では格式的尊待と非格式的尊待という二つのスピーチレベルが使用可能であるため、「行カナイ文」と「行ケナイ文」は格式的尊待と非格式的尊待という二つのスピーチレベルがある。しかし、「中途終了文」には格式的尊待を示す終結語尾「ㄴ니다(bnida)」がつかないため、スピーチレベルは非格式的尊待のみ許容される。
- 16 「テ」、「ノデ」、「カラ」という接続助詞の違いによる「中途終了文」、「行ケナイ文」、「行カナイ文」の分析は、紙面の都合上、割愛する。
- 17 フリードマン検定の結果が有意であった場合にのみ多重比較を行うため、距離度については多重比較を行わなかった。
- 18 「中途終了文」と「行ケナイ文」の配慮度が同じ程度、または、「行ケナイ文」の配慮度がより高いと答えた調査対象者を対象に追跡調査を行った。その際、以下のような意見があった（括弧内は国籍（J：日本）、性別（M：男性、F：女性）、調査対象者の通し番号）。「行けない」という表現は、何か他の用事等があり、「行くことができない」というニュアンスがあるような気がして、より配慮がある言い方（JF42）、「相手が本当に知りたがっていることを伝える方が相手のためになる」（JM26）、「省略せずに言うべきことを全部言うのが配慮された表現である」（JM10）、「実際のシチュエーションで感情を込めて申し訳なさそうに言う場合、「行けません」はとてもやわらかく言うと思う」（JM33）。

参考文献

- 生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー「断り」という発話行為について」『日本語教育』79, 41-52, 日本語教育学会
- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子(1986)『日本人とアメリカ人の敬語行動－大学生の場合－』南雲堂
- 井出祥子(1990)「待遇表現」『講座日本語と日本語教育12・言語学要説（下）』148-173, 明治書院
- 元智恩(2003a)「断わりとして用いられた「ノダ」－ポライトネスの観点から－」『計量国語学』24-1, 1-18, 計量国語学会
- 元智恩(2003b)「断わる場面における「ノダ」文と「것 같다」(geos gata)文について－それらのつかない文との印象比較－」『社会言語科学』6-1, 153-162, 社会言語科学会
- 宇佐美まゆみ(1993)「談話レベルから見た“politeness”－“Politeness theory”の普遍理論確立のために－」『ことば』14-12, 20-29, 現代日本語研究会

- 宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論の展開」『言語』31-1～31-12, 大修館書店
- 宇佐美まゆみ(2003)「異文化接触とポライトネス－ディスコース・ポライトネス理論の観点から－」『国語学』54-3, 117-132, 国語学会
- 岡本真一郎(1997)「聞き手への配慮と言語表現」『愛知学院大学文学部紀要』27, 23-36, 愛知学院大学文学会
- 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『文学部紀要』33-1, 1-262, 大阪大学文学部
- 永田靖・吉田道弘(1999)『統計的多重比較法の基礎』サイエンティスト社
- 洪珉杓(1994)「日本語音声の丁寧さの社会言語学的研究」筑波大学大学院博士論文
- 松村端子(1999)「日本語会話におけるポライトネス B&L の妥当性を中心に」『言語科学』34, 51-60, 九州大学言語文化部言語研究会
- 水谷信子(1991)「待遇表現指導の方法」『日本語教育』69, 24-35, 日本語教育学会
- 渡辺吉鎔・鈴木孝夫(1981)『朝鮮語のすすめ』講談社
- Brown, P. and Levinson, S.C (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Fraser, Bruce (1990) Perspectives on politeness, *Journal of Pragmatics* 14, 219-236.
- Hwang, Juck-Ryoon (1982) Deference versus politeness in Korean speech, Harald Haarmann and Hwang Juck-Ryoon (ed.) *International Journal of the Sociology of Language*, New York: Mouton De Gruyter.
- Kasper, Gabriele (1990) Linguistic politeness: current research issues, *Journal of Pragmatics* 14, 193-218.
- Lim, Tae-Seop (1988) A new model of politeness in discourse, Michigan State University Ph.D.
- Matsumoto, Yoshiko (1989) Politeness and conversational universals: observations from Japanese, *Multilingua* 8, 207-221.
- Park, Yong-Yae (1999) The Korean connective *nuntey* in conversational discourse, *Journal of Pragmatics* 31, 191-218.
- Siegel, Sidney (1956) *NONPARAMETRIC STATISTICS: For the Behavioral Sciences*. (藤本熙監訳 (1983)『ノンパラメトリック統計学－行動科学のために－』マグローヒルブック株式会社)
- Thomas, Jenny (1995) *An Introduction to Pragmatics* (田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳 (1998)『語用論入門－話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味－』研究社出版)
- 강길호(1992)「요청 상황에서 공손 전략과 공손 지각의 관계」『韓國言論學報』28, 5-31, 韓國言論學會
- 서경수(1984)「현대국어의 대우법－표식화 문제를 중심으로－」, 김중원編『国語敬語法研究』483-503, 集文堂
- 유경화(1999)「일본어의「～て」와 한국어의「～고」, 「～어서」 대조연구」『일어일문학연구』35-1, 131-153, 韓國日語日文學會
- 이기갑(1997)「대우법 개념체계에 대한 연구」『사회언어학』5-2, 645-669, 韓國社會言語學會

(投稿受理日: 2004年9月10日)

(最終原稿受理日: 2005年4月11日)

元 智恩（ウォン ジウン）

釜山大学校

609-735 韓国 釜山広域市金井区長箭洞山30番地

"Unfinished sentences" for declining a request in Japanese and Korean: From the perspective of politeness

WON Jieun

Pusan National University, Korea

Keywords

politeness, "unfinished" sentences, *ikenai* sentences, *ikanai* sentences

Abstract

Based on an augmented version of Brown and Levinson's (1987) theory of politeness, this article will compare Japanese and Korean patterns of declining requests. The specific points of analysis are threefold; "unfinished" sentences, where the main clause is abbreviated, and two types of sentence where the main clause is not abbreviated - negative potential sentences (hereafter *ikenai* sentences) and negative sentences (*ikanai* sentences). The research methods were a questionnaire to Japanese and Korean native speakers to gauge their perceptions of degrees of politeness in the "unfinished", *ikenai* and *ikanai* sentences.

The common points of Japanese and Korean were that in both languages the "unfinished" and *ikenai* sentences are of a higher degree of politeness than the *ikanai* sentences, "unfinished sentences" comparing to "*ikenai* sentences" were higher degree of 'off record'. One notable difference was that, in Korean "unfinished" sentences, there was a higher degree of the 'universal rules of politeness', which show consideration of maintaining face for other conversation participants, and of 'positive politeness', which demonstrates affinity between participants - but this feature was not seen in Japanese "unfinished" sentences.